またぎの学校

山における伝統を兼ね備えた
新たなインフラの提案

小野寺 健

福屋研究室

設計主旨

マタギをご存じだろうか。後継者不足が問題になっている秋田県旧阿仁町を発祥とする狩猟を生活の一部とする人々である。

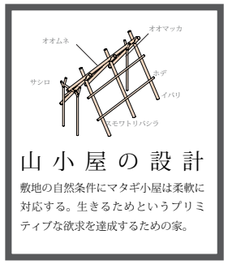
ツキノワグマをご存じだろうか。本州最大の動物であり、日本において数少ない人間の天敵になり得る動物である。

里熊をご存じだろうか。熊出没の緩衝帯としての中山間地域の消滅によって町降りてくる熊である。

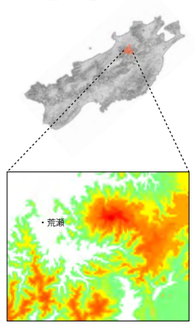
狩猟者が不足しているのをご存じだろうか。少子高齢化、農業人口の減少。いま熊を打てる人が少なくなってきている。

またぎの学校はマタギ文化の継承者の育成であり人の領域を守る山の堤防足り得る存在を育てる場所である。

マタギの見習い達はそれを阿仁で実践しながら学び、日本において自然との調整役として育っていく。

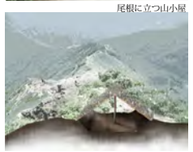


山小屋の敷地



熊の行動パターン、熊の食性からわかる植物の分布、里山の範囲をプロットし、山小屋の配置を決定したもの。この範囲で山小屋は成立する。

斜面地に立つ山小屋



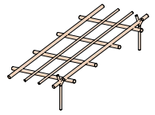
尾根に立つ山小屋

沢沿いに立つ山小屋

コナラの生息範囲の山小屋

コナラ（小楢、学名：Quercus serrata）
ブナ目ブナ科コナラ属の落葉広葉樹
熊の主食の一つで秋に実（ドングリ）が熟す。一般的に 200 ～ 600mの山地帯下部に多く植生する。

マタギ小屋の原型。低高度地域帯の風が弱く、積雪が多いところに向く。

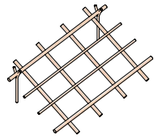


低高度地帯に効率的に圧力を与えるための量産型。春季から秋季にかけて利用。

屋根の葺材はこの地帯に見られる樹皮葺きとする。

ミズナラの生息範囲の山小屋

ミズナラ（水楢、学名：Quercus crispula Blume）
ブナ科コナラ属の落葉広葉樹
熊の主食の一つコナラ同様に秋には実（ドングリ）が熟す。一般的に 400m ～ 800mに植生する。

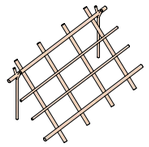


高度があがり、斜面地が多くなり、既存のマタギ小屋では対応できない場合、竪穴式の斜面に合わせた小屋になる。

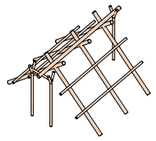
屋根の葺材はこの地帯に見られる樹皮葺きとする。

ブナの生息範囲の山小屋

ブナ（橅、梅、学名：Fagus crenata）
ブナ科ブナ属の木の落葉広葉樹
ブナは秋には実をつけ、上記同様に熊の主食である。主に海抜 1000m 以上のところに植生する。



高度はさらにあがり、勾配はさらに大きくなる。上記の片流れより斜面に対応し、勾配が大きくなる。



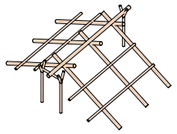
段階的に尾根ができて、尾根に立つ山小屋ができる。高度は高くないため、風圧力はまだ弱く素型に近い形となる。

屋根の葺材はこの地帯に見られる樹皮葺きとする。

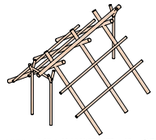
局所的に森林限界を超えるため笹葺きのところが出てくる。

猟場、尾根の山小屋

尾根は猟場の射手 (ブッパ) が位置するところであるとともに、熊の通り道になっている事が多い。また阿仁にはある程度の猟場ポイントがあり、左図に青色で示してある。



1000m以上の尾根においては強風がふくため勾配を抑え竪穴で居住空間を確保する。

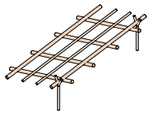


1000m未満の比較的風が弱いが、素型よりは勾配を抑えたもの。竪穴をつくり居住空間を確保する。

森林限界を超えるため木材を確保するのが困難なため笹葺きとする。

里山での山小屋

里山は集落に対しての熊除けバッファとして機能する。このバッファは事例より、0 ～ 300mの範囲内でバッファのポテンシャルを持つとする。

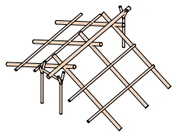


間引きや伐採作業の際の休憩小屋、または道具小屋。簡素なもの。基本的に熊猟には使用しない。

屋根の葺材はこの地帯に見られる樹皮葺きとする。

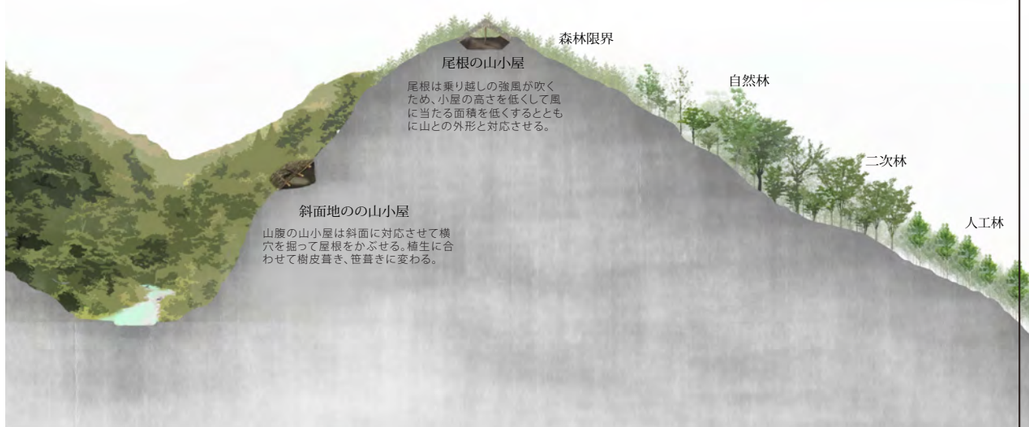
森林限界以上での山小屋

木が生えない森林限界以上では熊の餌となるものの少なく、近寄る事が少ない。阿仁周辺での森林限界は 1100m以上で、これに該当するのは主に森吉山である。



登山者向きの避難小屋。高度が高いため勾配は抑え竪穴式とする。基本的に熊猟には使用しない。

森林限界を超えるため木材を確保するのが困難なため笹葺きとする。



学校の設計

ここはマタギが共に寝泊りし、共に学ぶ場所である。熊を狩った時はけぼかいの儀式によってそこは時に山の神に捧げる祭壇となる。

現状

問題の流れ＞

第一次産業の衰小
少子高齢化
都市への人口流入

狩猟者の減少
里山の荒廃

人間の自然に対する圧力の消失

熊の里熊化

熊による人身事故増加

提案

提案の流れ＞

step.1 狩猟者の公的化

step.2 マタギの民俗知の活用

step.3 またぎの学校

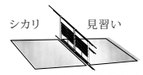
step.4 林業、狩猟からの包括的アプローチ

step.5 山のインフラとして全国に広がるマタギ

母屋にかかる屋根は秋田・山形から越後にかけて分布している中門造りをベースとして構成した。中門造りは豪雪地帯に適しており、雪が積もった場合には曲り屋の土間の出口から出る。

.1 中門造りをベースとした建築

この部屋はまたぎの頭領の「シカリ」が生活する。シカリは本学校の先生の役になる。シカリは生徒にマタギの膨大な民俗知を見習いたちに伝承する。シカリと見習いの間には仕切りはあるがこれは障子戸であり、先生と生徒という立場ではあるがマタギという仲間であるという微妙な関係性を障子という境界を使い空間化している



師匠と弟子でありながら命を託しあう微妙な関係性は障子によって空間化される。

.2 またぎの頭領と見習いとの境界

南北を強調するように架かる梁は、熊の解体の際に行われるけぼかいの方角を重要視することに起因し正確に方位を表している。けぼかいの際は熊頭を北に。猟で使った道具を南にして行う。これらの一連の流れは南北に延びる強調された梁によってあらわされる。

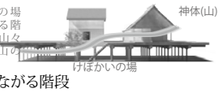
.3 南北に大きく架かる梁

マタギのフィールドは主に山の中ではあるが、自然と人間との調和を図っていく上で学術的な見地からもマタギの見習いたちは学ぶ。狩猟の専門家だけではなく自然に関した幅広い知識を習得する。

マタギ＋academic

.4 狩猟の専門家だけではなく自然の専門家として

この階段は下のけぼかいの場から、上の住居部分に伸びる階段で、けぼかいの場-階段-山々の神体へと続く。またぎと山の神をつなげる道でもある。



.5 住居部分へとつながる階段

家の中にか南北に貫通した空間がある。この空間はけぼかいの場から山の神につづく通り道で、あえて家の中を貫通することでそれを強く認識させるように設計した。

.6 山の神へと続く空間

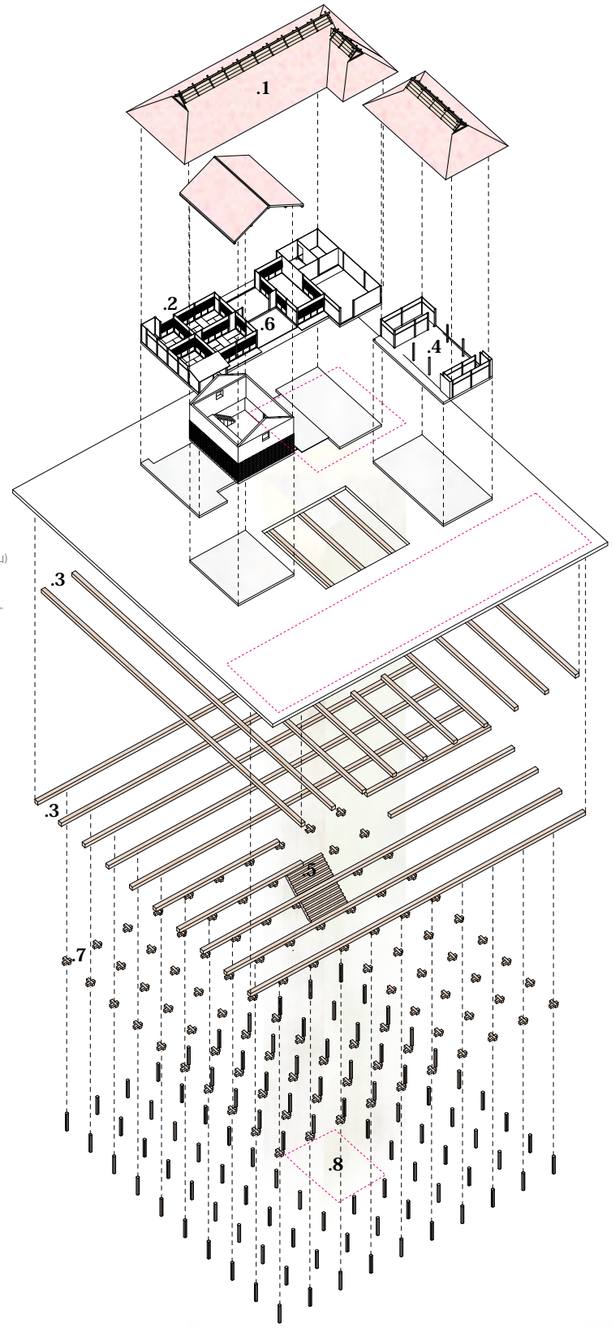
梁と柱の接点を強化するのはもちろんのこと寺社仏閣等でよくみられるこの組み物はピロティ空間において神聖な空間であることを喚起させます。

.7 梁の荷重を柱に伝える組物

山の神からの授かりものの熊に感謝をこめてけぼかいの儀式を行う。この儀式はまたぎにとって大きなアイデンティティである。そのため建物の中央部、印象的なヴォイドの下に配置した。

.8 けぼかいとしての場

建物のピロティ部分からけぼかいの場を望む。ここは建物の中心であり、マタギの生活の中心である熊を解体し神に感謝する場である。



25
2007年度
建築学科
卒業研修
報告集
東北工業大学